

## 「航海王」中所見的領導力

永井 隆之\*

### 中文摘要

漫畫《ONEPIECE（中譯：航海王）》是由尾田榮一郎創作，自1997年7月起開始連載於《週刊少年JUMP》（集英社出版）的人氣漫畫作品。日本國內累積發售量於2017年10月正式突破4億3000萬冊。同時臺灣在2014年7月也舉辦「航海王特展」，由此可知本作品是探討日本文化時不可忽略的對象。如同主角魯夫經常在劇中高呼「我要成為航海王」一般，本研究將聚焦在企圖成為故事架構中擁有最高權力的「王」這一點。作品中精心地刻劃出主角成為「航海王」的過程，不單單只是描述角色們，而是讓生活在現代社會中的讀者，也能認同並理解主角之所以能夠成為「航海王」的原因。好不容易總算擁有民主主義之普世價值的現代日本社會中，創造出「王」的故事究竟具備了何種架構，本研究將針對魯夫的領袖特質進行剖析。

關鍵詞：航海王 ONEPIECE 王權神話 民主主義 領導人

---

\*國立政治大學日本語文學系副教授

# The Leadership of “the Pirate King”

NAGAI, Ryuji\*

## Abstract

ONE PIECE is Oda Eiichirō’s popular comic series featuring in Weekly Shōnen JUMP magazine (Syūeisyā) since July, 1997. Its total circulation in Japan has surpassed 430 million copies on October, 2017. Seeing “ONE PIECE exhibition” was held in Taiwan on July 2014, ONE PIECE has become a comic work which cannot be neglected when regarding Japanese culture.

As what the protagonist Luffy always claims in the story, “I, will become the King of Pirates!”, this research focuses on Luffy’s aim to become the most powerful “king” in ONE PIECE world. This comic series depict the process of how the main character becomes “the King of Pirates” in an elaborate manner. By doing so, it persuades not only characters in the stories but readers in the modern world why the protagonist has become the appropriate figure to be “the King of Pirates.” In the modern Japan where democratic values are at least shared and supported, what kind of structure does a story of creating a “king” have? This paper pays attention on Luffy’s quality as a leader.

Keyword: King of Pirates (the Pirate King), ONEPIECE, legend of monarchy, democracy, leadership

---

\*Associate Professor, Department of Japanese, National Chengchi University.

# 「海賊王」のリーダーシップ

永井 隆之\*

## 要旨

漫画『ONEPIECE』は『週刊少年ジャンプ』（集英社）にて1997年7月から現在まで連載中の尾田栄一郎作の人気漫画である。日本国内累計発行部数は2017年10月には4億3000万部を突破している。台湾でも、2014年7月には『ONEPIECE展』が開催されており、日本文化を語る上で無視できない作品となっている。

本研究が注目するのは、主人公ルフィが「海賊王になる」と常に発言しているように、「海賊王」という物語世界における最も強力な「王」を目指している点である。本作品では主人公が「海賊王」になるまでの過程が丹念に描かれている。それは物語に登場するキャラクターたちだけでなく、現代社会に生きる読者を、主人公が「海賊王」になるに相応しい人物として説得、理解させる試みにもなっている。曲がりなりにも民主主義的価値観が共有される現代社会において、「王」を生み出す物語は、どのような仕組みを有しているのか。今回はルフィの「海賊王」に相応しいリーダーとしての資質に注目する。

キーワード：海賊王 ONEPIECE 王権神話 民主主義  
リーダーシップ

---

\* 国立政治大学日本語文学科准教授

# 「海賊王」のリーダーシップ

永井 隆之

## 1. はじめに

漫画『ONEPIECE』は『週刊少年ジャンプ』（集英社）にて1997年7月から現在まで連載中の尾田栄一郎作の人気漫画である。日本国内累計発行部数は2017年10月には4億3000万部を突破している。台湾でも、2014年7月には『ONEPIECE展』が開催されており、日本文化を語る上で無視できない作品の一つとなっている<sup>1</sup>。

本作は、主人公のルフィが「この世のすべてを手に入れた者の称号」たる「海賊王」になる夢を叶えるために、かつての海賊王がグランドラインの最果ての島ラフテルに残したという「富と名声と力のひとつなぎの大秘宝」ワンピースを求めて、ルフィの夢に共感した個性あふれる仲間たち「麦わらの一味」（ルフィを入れて10名、2018年9月時点。以下「一味」と略す場合あり）と大波乱の航海を続ける冒険活劇である。

簡単に一味の者たちを紹介しておく。【モンキー・D・ルフィ】船長。悪魔の実「ゴムゴムの実」を食べたゴム人間。自由奔放な性格。夢は「海賊王になる」こと。【ロロノア・ゾロ】剣士。「三刀流」の使い手。禁欲的に修練に励むが、酒に目がない。方向音痴。夢は、幼い頃に亡くなった友人・くいなに

---

<sup>1</sup> 「GUINNESSWORLDRECORDNEWS OFFICIALLY AMAZING」  
<http://www.guinnessworldrecords.jp/news/2015/6/onepiece20150615>  
(2016年5月10日閲覧)。

「「ONE PIECE」累計発行部数4億3000万部突破！ルフィと同じ5億も視野に2017年10月16日」『コミックナタリー』

<https://natalie.mu/comic/news/252971> (2018年8月16日閲覧)。

「尾田栄一郎監修 ONEPIECE展」<http://onepiece-exhibit.tw/> (2016年5月10日閲覧)。

誓った世界一の剣豪になること。【ナミ】天候の予測と海流の把握に長けた優秀な航海士。金目のものが大好き。その場の損得勘定に基づく駆け引きが上手。夢は世界中の海図を描くこと。【ウソップ】狙撃手。弱音を吐くネガティブな性格。ウソを言う癖がある。夢は勇敢な海の戦士「狙撃の王」になること。【サンジ】コック。料理の腕は超一流だが、女性に惚れやすい。世界中の魚が集まる伝説の海「オールブルー」を目指す。【チョッパー】船医。トナカイ。悪魔の実「ヒトヒトの実」を食べて人語を解す。褒められると照れて悪態をついてしまう癖がある。夢は何でも治せる医者「万能薬」になること。【ロビン】考古学者。世界政府が禁ずる古代文字の解読を唯一行える者。悲観的な予想を感情を変えずに呟くことがある。夢はグランドライン最果ての島・ラフテルにある「真の歴史の本文（リオ・ポネグリフ）」を解読し、歴史の謎を明らかにすること。【フランキー】サイボーグの船大工。一味の二隻目の海賊船「サウザンド・サニー号」を作る。人情話に涙脆い兄貴分な性格。夢は自分の作った「最高の船」の航海を「海の果て」まで見届けること。【ブルック】音楽家。一度死んだが悪魔の実「ヨミヨミの実」で骸骨の体で蘇生。自虐的な駄洒落を言ってしまう癖あり。カリスマシンガーとしての顔を持つ。夢はグランドラインを一周した後に鯨のラブーンとの再会の約束を果たすこと。【ジンベエ】魚人島「リュウグウ王国」出身のジンベエザメの魚人。元王下七武海（海軍に公認された有力海賊）にして「タイヨウ」の海賊団元船長。「魚人空手」の使い手。義理と人情に厚い親分肌。超一流の操舵手。

物語の現在、麦わらの一味は成長を遂げ、最高権力「世界政府」に属する海軍、それに認可された七人の海賊「王下七武海」、グランドライン後半のフロンティア「新世界」の四人の大海賊「四皇」、そして「世界政府」を打倒すべく活動する

「革命軍」も認める一大勢力となっている。

本研究が注目するのは、ルフィが「海賊王になる」と常に発言しているように、「海賊王」という物語世界における最も強力な「王」を目指している点である。本作品では主人公が「海賊王」になるまでの過程が丹念に描かれている。それは物語に登場するキャラクターたちだけでなく、現代社会に生きる読者を、主人公が「海賊王」になるに相応しい人物として説得、理解させる試みにもなっている。曲がりなりにも民主主義的価値観が共有される現代日本において、「王」を生み出す物語は、どのような仕組みを有しているのか。そして、その「王」とはどのような性格を有するものなのか。本研究は『ONEPIECE』の既刊分の物語を内容の変更不可能な史料と見なし、これを現代社会の求める「王を生み出す物語」、現代の王権神話として読み直す試みである。今回は主人公ルフィの「海賊王」となるに相応しいリーダーとしての資質に注目する。

これまでの研究において、ルフィのリーダーの資質としてあげられている種々の条件には、一部に事実誤認による修正が必要なものや、ルフィ以外の一味の者たちにも当てはまるものがある。それでは一体、ルフィ独自のリーダーの資質とは何なのか。その独自性にこそ「海賊王」、現代社会に相応しい「王」になるための条件が隠されているはずである。

本研究の検討対象は、『ONEPIECE』〈ジャンプコミックス〉1巻から90巻までの既刊単行本（集英社、1997年12月-2018年9月）とし、テレビアニメ版、劇場版、他言語翻訳版などを含まないことにする。

## 2. ルフィのリーダーシップ

これまで様々な専門分野に基づき、様々な観点から研究や評論が重ねられてきたが、ルフィのリーダーシップについて、

種々の条件をあげて本格的に検討しているのは、内田樹<sup>2</sup>と安田雪<sup>3</sup>である。本研究では、彼らの指摘した内容について物語に即し検討していきたい。

### 2.1. 無邪気さ、食欲を除く無欲さ

「無邪気さ、食欲を除く無欲さ」は、ルフィが麦わらの一味さらには世界の中心となり得る「空虚さ」を構成する要素として取り上げられたものである(内田, 2014, pp. 195-196)。

まず、「無邪気さ」については、彼だけがそれがあるように描かれているわけではないことに注意すべきである。一味の「無邪気さ」がわかる例としては、彼らがロボットの合体、大型のクワガタ虫、船のバージョンアップ、拾った木の棒、体の変形など「男の子」の好きそうな「格好良い」モノを見て「キラキラ」と目を輝かせるシーンがある(17巻, p. 76; 25巻, pp. 169-170; 27巻, p. 169; 45巻, p. 114; 64巻, p. 180, pp. 192-193; 70巻, p. 93など)。

一味の者たちの内、この「無邪気さ」を示す記号である目のあたりの「キラキラ」は、ウソップ・チョッパーなどの幼さを残す「男の子」キャラクターを中心に見られる(同前)。フランキーの場合、その格好良さを体現するロボットそのものになる(64巻, p. 180, pp. 192-193; 70巻, p. 93)。サンジやゾロも彼らほどではないが、キャンプファイヤーの木材を喜々として組む、皆でロボットのような合体に参加するなど、「男

<sup>2</sup> 内田樹「解説 街場の『ONEPIECE』論②—新時代を生き抜くためのしなやかなコスモロジー」(尾田栄一郎『ONEPIECE STRONG WORDS〈下巻〉』集英社、2011年、pp. 186-222)、内田樹「解説 街場の『ONEPIECE』論③—「生きるもの」の側に与し続けるという真理」(尾田栄一郎『ONEPIECE STRONG WORDS 2』集英社、2014年、pp. 188-215)。なお、著者はフランス文学専攻、哲学研究者。京都精華大学人文学部客員教授。主著書に『日本辺境論』(新潮新書、2009年)などがある。

<sup>3</sup> 安田雪『ルフィの仲間力』(株式会社アスコム、2011年)、安田雪『ルフィと白ひげ 信頼される人の条件』(株式会社アスコム、2012年)。なお、著者は社会学者、ネットワーク分析研究者。関西大学社会学部教授。主著書に『実践ネットワーク分析 関係を解く理論と技法』(新曜社 2001年)などがある。

の子」のような無邪気な態度を見せる時がある(27巻, p. 139; 49巻, p. 34)。一方、女性のキャラクターにそのような「無邪気さ」は表現されていない。むしろ、目を「キラキラ」させる「男の子」キャラクターを冷ややかに見つめるシーンがあるほどである(49巻, pp. 35-36; 64巻, pp. 192-193; 70巻, p. 93)。したがって、物語における「無邪気さ」は、「男の子」のジェンダーの一種として機能しているものと思われる。それ故、「海賊王」を目指すルフィのリーダーシップの一つに含めるわけにはいかないだろう。

次に「食欲を除き無欲」についても再考が必要である。ルフィの食欲が特に肉に対する欲求であること(47巻, p. 185など)はさておき、先述した「男の子」としての「カッコいい」ものに対する憧れや、後述する「おもしろい奴」を集めようとする癖、そして、なぜか船の先端に銅像を建てようとする(32巻 p. 134)など、種々好奇心旺盛であり、彼の欲が食欲を中心とすることは認めるにしても、それだけにあるような印象は受けない。そして若干の性への関心もあるようである。例えば、ある大浴場にて男性キャラクターの数人が女性用の大浴場を覗くシーン。小さい絵ながら、ハートマークを周囲に飛ばすサンジに比べ、ルフィは目を丸くしている表情から、好奇心程度の関心があることがわかる(23巻, p. 163)。おしなべて、思春期を前にした小学校低学年程度の子供の欲が想定されていると思われる。

他の一味の者たちの内、ルフィと同じく「男の子」キャラクターであるウソップ、チョッパーもルフィと同程度の欲を有していると思われる。ただし、チョッパーは性には無関心のようなのである。先述した風呂覗きのシーンではルフィやウソップと異なり、壁の上で寝ているように見え、女性の方を見ていない。「無欲」をいうなら、チョッパーにこそ当てはまるだろう。



食欲ではないが、これに類する単一欲の例としては、サンジの女性に対する惚れっぽさ（例えば 12 巻, p. 156 など。特に美女。47 巻, p. 185）やナミの金目の物好き（例えば 27 巻, p. 119）などがあげられる。彼らのこれに対する執着は事あるごとに物語に描かれており、単一欲を除いて無欲というなら、彼らのことではないかと思われるほどである（それでも彼らに他に欲がないというわけではない）。このように「食欲以外は無欲」は、その設定自体に問題があるといえる。

## 2.2. 自らの自由（夢の追求）を犠牲してでも他者に無限責任を有する（徹底的に他者を救済する）

自らの自由（夢の追求）を犠牲してでも他者に無限責任を有する（徹底的に他者を救済する）性格は、内田、安田共にルフィのリーダーシップを示す重要な指標として指摘されている（内田, 2014, p. 215; 安田, 2012, pp. 46-52）。しかし、それはルフ以外の麦わらの一味の者たちにも共通するものであると思われる。言うなれば、彼らは、目の前で苦しんでいる者がいればこれを放置できず、自分の夢や自由を犠牲にしても、どんな強敵と戦うことになっても命がけで救おうとし、またどんなに困難であっても相手との約束を守り、かつて受けた恩や思いに命がけで報いようとする、つまり、自分と関わりを持った他者に無限に責任を取ろう（徹底的に他者を救済しよう）とする人たちの集まりなのである。

例えば、ゾロはある港町で、海軍大佐モーガンの息子ヘルメッポに暴力を受けた少女を助けた代わりに海軍に捕まり、処刑されそうになっていた（1 巻, pp. 139-143）。ウソップは生まれ故郷の村を守るために、村人に知らせずにたった一人で海賊団と戦おうとした（4 巻, pp. 26-27）。また、サンジはかつて命がけで助けられた料理長ゼフに恩返しをするため、店を破壊しようとする海賊団の攻撃をまともに受け続け（5 巻, p. 15）、ナミは、幼少期に魚人海賊のアーロンに育ての親

ベルメールを目の前で殺されたにもかかわらず、村人の命を守るためにその海賊団に入り、アーロンに命じられるまま海図を描きつづけた過去がある（9巻, p. 165）。そして、ロビンは幼少期に海軍に母親と島民を殺され、自身も指名手配を受けた悲しい過去を持つが、仲間と信じる一味を守るために、自らを犠牲にしようとした（38巻, p. 40）。フランキーもかつて自分の軽率な行動のせいで死なせてしまった船大工の師匠トムへの罪滅ぼしに、自分の夢を封印し、街を守り続けてきた（45巻, pp. 136-137）。ブルックも肉体を腐らせ骨だけの姿に蘇り、五十年間暗い海を孤独に彷徨いながらも、クジラのラブーンとの再会を果たす約束を忘れずにいた（47巻, pp. 192-205）。この他にも本作品には類似する大小のエピソードが数多く見られる。

かかる彼らの性質を言い表す独自の表現は作中に散見する。例えば、他者を守るために自らを犠牲にする覚悟を持った者の意味として使われている「いい奴」がある（1巻, p. 81, pp. 98-99; 16巻, p. 86等）。この「いい奴」は一味に加わる新たな者たちや、友人となる者の重要な条件となっている（後述）。この他には「器」の大きさ（5巻, p. 62など）や「立派」（4巻, p. 32など）、「男」（47巻, p. 192）という言い方もある。これらは必ずしも一味の者だけに用いられているわけではないが、自らの犠牲を厭わず他者を徹底的に救済する者に対して使用されている。

このようなことから、自らの自由（夢の追求）を大切にしながらも、これを犠牲してでも徹底的に他者を救済するという性格は、ルフィのリーダーシップを示す彼の独占物ではなく、一味全員に共通するものであったことがわかる。この一味が「上下関係がなく」「フラットな関係」（安田, 2011, pp. 123-124; 安田, 2012, pp. 61-66）に基づく組織であるように見えるのは、ルフィのリーダーシップというより、彼らがもともと自らの自

由(夢の追求)を大切にしながらも、他者の自由を何よりも尊重する性格を共有しているからに他ならない。

### 2.3. 他者に偏見を持たない

ルフィの「他者に偏見を持たない」性格については、内田、安田ともに指摘がある(内田, 2011b, pp.192-193; 安田, 2011, pp.123-124; 安田, 2012, pp.61-66)。だが、ルフィは他者に偏見がないというより、異形の者を「おもしろい奴」と思える感性を持つ。「おもしろい奴」という理由で仲間に入れようとする点で、コレクター的感性がある(3巻, pp.113-115; 49巻, p.49; 46巻, p.132など)。なお、人でない場合は飼おうとする(46巻, p.128, p.154など)。ルフィ以外の麦わらの一味の者たちには彼のように異形の者を「おもしろい奴」とする感性は見られない。ただし、チョッパーなど「男の子」キャラクターがロボットなどを見て目を輝かせる場合(前述)は別である。しかしだからといって、彼らが異形の者に偏見を持っているかといえ、そうともいえない。

例えば、ナミはかつて「人語を解する青鼻のトナカイ」として「化け物」と差別されていたチョッパーに初めて対面した際、何の偏見もなく、一味に入るよう誘っていた(16巻, pp.76-77)。そして、チョッパーも、科学者シーザーに人体実験され、巨大化した子供たちに同情し、何とか救済できるよう尽力していた(69巻, pp.198-199)。また全身が「骨だけ」のブルックをルフィが面白がって、一味に加えようとした時、その姿に恐がる者もいたが、ブルックが他者との約束を大切にすることなく「いい奴」だと知ると、一味はその外見を気にすることなく直ちに仲間として迎えようとしている(47巻, pp.192-205)。また、彼らはシャボンティ諸島において人々から差別されているという魚人族に対して何ら偏見を持っていなかった。むしろサンジに至っては、魚人族の女性を見て、人間の女性同様興奮し、それが過ぎて鼻血を噴き出して倒れてしまったほ

どである(62巻, pp. 111-112)。また魚人族のジンベエは一族の禁を破って、人族であるルフィへの輸血に名乗りをあげている(66巻, pp. 142-145)。ルフィは確かに他者に偏見を持たないが、一味の他の者も、彼に負けず劣らず偏見を持たない、あるいはこれを打ち破る者たちであるといえる。

#### 2.4. 過去の確執に拘らない

このルフィの「過去の確執に拘らない」点については、安田の指摘がある(安田, 2011, pp. 81-84)。確かにルフィはいくつかの例でかつて敵対していた者を許している。例えば、アラバスタ王国の乗っ取りを進めていた王下七武海の一人クロコダイルの配下として暗躍していたロビンが麦わらの一味に加えるよう求めてきた際に、彼がこれを直ちに認めたことはその最たるものであろう。「死を望む私をあなたは生かした。それがあなたの罪。私には行く当ても帰る場所もないの。だからこの船において」と言うロビンに、「何だ、そうか、そらしょうがねェな。いいぞ」と簡単な返事である。一味は共に旅をした王女ビビを苦しめた者の一人としてロビンの加入に反対するが(女性に惚れやすいサンジは例外)、ルフィは「心配すんなって。こいつは悪い奴じゃねェから」と皆に受け入れを求める。彼女も直ちにチョッパー、ウソップにはロビンの「ハナハナの実」の能力を用いた遊びによって、ナミにはクロコダイルから盗んだ宝石を提供することで懐柔をはかる(24巻, pp. 22-25, pp. 28-39)。このロビンの場合は、彼女が、クロコダイルに一度敗れたルフィの命を助けており(20巻 pp. 68-71)、また、ロビンが事情があつてクロコダイルに従っていたことをアラバスタ国王に打ち明けた直後、傍にいたルフィが二人を助け出すなどの経緯があり(24巻, pp. 28-33)、まさにルフィが「悪い奴ではない」と言うように、既に単純に敵とは言い難い人物となっていたことに留意すべきである。いわばロビンは物語の過程で一味加入の条件、苦しむ他者を

救うことのできる「いい奴」であることがある程度証明された存在といえるだろう。そして、これに加えてもう一つ注目しなければならないのは、彼女が「行く当ても帰る場所もない」と自らが窮地にあることを打ち明けていることである。このことから、ルフィの「過去の確執に拘らない」は、相手の窮地を知ることによって生じている可能性がある。

他の例をみてみよう。例えば、先のエピソードの後、ロビンが海軍の秘密諜報機関 CP9 によって海軍の裁判所に連行される事件が起こり、ルフィたちが彼女を救出すべく出発の準備を進めていたが、この時に、彼女と同じく連行されたフランキー（この時は一味未加入）を救うために、彼の率いるフランキー一家がルフィたちに同行する許可を求めてくることがあった。このフランキー一家は以前、ウソップを襲い、一味の財産を奪った集団であり、いわば一味と敵対関係にあった。そして、一味は彼らのせいで船を修理することも新たに購入することもできなくなり、これに責任を感じたウソップがルフィと対立、決闘の末、一味を脱退する事件も起きていたのである。それ故、ナミが「冗談じゃないわ。あんたたちが私たちに何をしてきたかわかってんの」とフランキー一家を非難しているのは、当然のことといえる。だが、それでもルフィは彼らの要求を受け入れてしまう。それは、彼らが「アニキの為なら命だって惜しくない」。「恥をしのんで頼んでる」と叫び、麦わらの一味に許されるような立場ではないことを自覚しつつも、仲間を助けたいとの一心から、「土下座」をしてまで懸命に懇願してきたからである。このような、いわば自らの身を窮地に置く姿勢を示したからこそ、ルフィは心を動かされ、彼らを許し、手を組むことにしたと思われる。

以上二つの例からは、「過去の確執に拘らない」者がルフィだけであり、他の者たちは過去の確執に拘っているかのように見える。だが、それは彼らがかつての敵に対し個人的な恨

みを持っているというより、その敵に仲間を苦しめた過去があり、これに対する仲間への同情から、容易に許すことができなかつたからと考えるべきである。それ故、逆に仲間に関わる過去の確執ではなく、自分のみのそれであれば、ルフィ以外の一味の者であっても、「過去の確執に拘らない」事例が出てくる。

例えば、かつてゾロはある港町でたまたま助けた少女のかわりに海軍大佐モーガンの息子ヘルメッポに捕まり、処刑されそうになった過去があったが(前述)、その後出会ったヘルメッポに対して全くの無関心であった。逆にヘルメッポが自分から名乗り出て過去の罪状を説明しても思い出せない程である(45巻, pp. 42-43)。ゾロの場合、「過去の確執に拘らない」どころか、その確執の存在すら忘れてしまっているのである。これはこの確執が自分にのみ関わることだからであろう。それ故、たいしたことではないと彼は考え、その確執ごと忘れてしまったと思われる。

この他、ナミは、かつてアーロンの海賊団に彼女の育ての親を殺された過去があったが(前述)、その後、生き残りの元幹部ハチを許し、彼の窮地を救っている。当初、一味はハチをアーロン海賊団の元幹部と同一人物であるとは知らず、たまたま出会った人魚のエイミーたちから、彼女たちを助けるために人身売買を生業とする人攫い集団に捕らわれたハチの話を知り、その救出に協力しようとした。ハチの姿を見、彼がアーロン海賊団の元幹部と同一人物であることが判明すると、一味の内、当時の事情を知るルフィらは救出することを止めてしまう。だがその後、一人救出に向かったエイミーが捕まった後、ナミが「ハチは大丈夫。実は無害な奴だから」とハチとの過去の確執を水に流す発言をし、彼を許している。このナミの一言を契機に、ルフィがハチやエイミーたちを救出することを決める。ナミがハチを許したのは、彼がサンジ

の問いかけに思わず正体を明かしてしまう正直さを示し、さらに敵に捕えられながらも身を挺してエイミーたちを守ろうとしたこと、つまり、ハチが他者を救うために自らを窮地に置く姿をナミに見せたからであろう。これはルフィがフランキー一家を許した例と酷似している(51巻, pp. 18-25)。

またこの時、ハチとの過去の確執に拘っていたのは、ルフィ、ゾロ、サンジ、ウソップらかつてアーロンと戦った者たちである。この時、ルフィは「何だ、お前だったのか、はっちんていうタコ焼き屋は。アーロンとこのタコッパチ、そうとわかりゃ、おれ達はお前なんか助けねえぞ」とまで言っている(51巻, p. 20)。彼らが過去の確執に拘ったのは、個人的恨みからではない。かつてハチにナミを苦しめた過去があり、その彼女に同情したからである。このような場合、過去の確執に拘るのはルフィも例外ではなかったことがわかる。

もう一つ、ルフィが過去の確執に拘る例がある。それはフランキーに対してである。彼の子分に対しては、彼らがフランキー救出のために自らを窮地に置き、助力を請うて来たので許した(前述)、だがフランキーに対しては、彼からやや高圧的に一味に助勢すると言われたせい、「おれはまだウソップの事、根に持ってんだからな」と許さなかった(41巻, p. 221)。これも自分の事ではなくて、かつてフランキーに襲撃されたウソップに同情し、さらにフランキーに自らを窮地に置くような態度が見られなかったことから、過去の確執に拘ったと見るべきだろう(この他にも類似のエピソードがあるが略す)。

このように一味には、かつての敵が追い詰められた窮地にある場合、過去の確執に拘らず、これを許し、救う傾向にあり、また逆に、その確執が仲間やそれに類する者たちの苦しみを伴うものであれば、その者に同情してこれに拘るという傾向が見出せる。ルフィも例外ではない。これは一味が皆、自分のことはさておき、他人の心配ばかりをする極端に利他

的な性格を有していることと深い関係があろう。この性格は、窮地にあるかつての敵を許しこれを救う気持ちにも、やはりかつてその敵に苦しめられた仲間のことを思い許せずにいる気持ちにも作用する。それがどちらかになるかは、かつて敵だった者の態度や状態、その敵に苦しめられた者の許しの有無や被害の度合い、その者との親疎の度合いなどによって決まるものと思われる。したがって、この「過去の確執に拘らない」ことは、ルフィだけに当てはまるものではなく、また、彼すらもそうでない場合があるので、彼のリーダーシップを示す条件としては適当ではないと思われる。

## 2.5. 仲間選び・人材登用における主導性

仲間選び・人材登用におけるルフィの主導性について。内田が言うように、確かにルフィが人物を評価する場合、「外形的にどれだけ醜悪であろうとも、敵対的な形をしていようとも」、それに拘ることはない(内田, 2014, pp. 204-205)。彼は「偏見を持たない」どころか、むしろ異形の外形が「おもしろい」評価の対象となる場合すらある。実際、物語ではルフィが偶然会った者を「おもしろい」と思い、一味に勧誘するシーンがいくつか描かれている。

だが、それだけでは麦わらの一味の全員から反対に合い、人材登用は完成しない。その採用にあたっては彼の独断ではなく、一味の承認が必要である場合が多く見られる。内田・安田共にルフィの主導性を強調するあまりこのことに言及することがない(内田, 2014, pp. 204-205; 安田, 2012, pp. 66-68)。また、この仲間選びにあって、ルフィや一味の者たちが最も重視するのは、異形の「おもしろい奴」ではない。安田が物語に即して指摘するように「他人を大事にできる」「いい奴」かどうかである(安田, 2011, pp. 72-79)。これは、一味の他の者たちが異形の者に偏見があるからではない(前述)。彼らが「いい奴」であることを重視するのは、彼らに共通する性格、



自らの自由(夢の追求)を犠牲してでも、徹底的に他者を救済する性格に基づいている。新たにメンバーに加わる者に対してこの性格を求めるのは至極当然のことといえるだろう。

例えば、ゾロの場合は、ある港町で出会った少女を守るために海軍に捕まっていたところをルフィに「いい奴」だと見込まれる。そして、命を助けることと引き換えに一味に入ることになった(1巻, pp. 100-103, pp. 139-143)。

ウソップの場合は、村を守るために共に戦った過程でルフィから「器の大きさ」を認められ、その戦いの後、ルフィだけでなくゾロからも「もう仲間だろう」と言われ、いつの間にか一味に加入することになった(4巻, pp. 26-27; 5巻, pp. 60-62, p. 121)。その後、彼は船の処遇を巡ってルフィと対立し決闘の末、一度一味を脱退する(前述)。その後、紆余曲折を経て再度加入しようとするが、これに当初、ルフィはチョッパーと共に喜んだが、ゾロがウソップにケジメをつけさせるために謝罪が必要であると説き、これにサンジが賛意を示すと、ルフィも他の者たちもこれに従った。それ故、ウソップは自発的に皆に謝罪するまで帰参を許されなかったのである(35巻, pp. 70-125; 45巻, pp. 150-153, pp. 160-167)。

チョッパーの場合は、ルフィよりもナミが先に勧誘している(前述)。そしてルフィはサンジと共に、チョッパーが喋るトナカイであることから「おもしろい」と感じ、さらに鳥の親子のいる巣を守るために冬にも関わらず扉を開け放ししていたことを知り、「いい奴」だと理解する。そして一味と共に戦い、その後、ルフィから誘われ一味に加入している(16巻, pp. 82-86; 17巻, pp. 61-62; 17巻, pp. 140-145)。

ナミの場合は、ゾロ、サンジ、ウソップが、ナミが村を守るために敢えてアーロン海賊団の傘下に入ったことを知り、「いい奴」と理解することで、ルフィと共にアーロンたちと決闘することを決め、その後、ルフィの呼びかけによってナ

ミは一味に加入する(9巻, pp. 168-205)。

ロビンの場合は、本人自らが一味に加入を求めて、ルフィから「悪い奴じゃない」と言われ許可を得た後、他の者たちの好む方法で懐柔し、仮に一味に受け入れられている(前述)。その後、ロビンが一味を抜け、世界政府の秘密諜報機関 CP9 に連行されるが、後で皆はそれがロビンの一味を守るための自己犠牲だったことを知り、ロビンが仲間思いの「いい奴」であることが深く認識される(38巻, pp. 32-83, pp. 108-145)。そして、ロビンを救うため、一致団結し海軍の司法の島に戦いを挑み、決戦の場にて居並ぶ敵とこれに捕らえられたロビンと対峙する。ここに至りロビンを取り戻して一味として改めて迎えようとする雰囲気がかつてない程に高まり、ルフィが彼女に「生きていと言え」(一味と共に生きていと言え)と呼びかけ、彼女も「生きてい。私も一緒に海へ連れてって」と応えることで、彼女の一味再加入が決定的となり、仲間としての連帯感が一気に高まる(41巻, pp. 18-45, pp. 194-205)。

フランキーの場合、ロビンと共に捕らえられていた時から、一味と共に戦おうとするのであるが、まだルフィから許されず(前述)、戦いの後、フランキーが一味の元に訪れ(この時、ルフィは寝ており、ゾロとウソップは不在)、一味から奪った金で強力な木材「宝樹アダム」を購入し、自ら設計した船を作り、これを一味に「乗ってってくれ」と懇願することで、彼らから「いい奴だなあ」と認められている(45巻, pp. 20-23)。その後、ルフィからも「何だ、あいつ、いい奴なんじゃねえか」と評価を改められる(45巻, p. 94)ことで、フランキーが受け入れられる素地が整う。最後は亡き師匠トムへの贖罪の意識を捨てきれない彼を周囲が騙す形で、ルフィが迎え入れる(45巻, pp. 117-147)。

ブルックの場合は、ルフィが最初その彼の異形ぶりを気に入り「おもしろい奴」であることを理由に、一味に勧誘しよ

うとするが、一味には「勝手に決めるな」と拒絶され、さらにブルックにも謝絶され失敗する(46巻, pp. 48-65)。その後、彼が一味も遭遇したことのあるクジラのラブーンとの再会の約束を守ろうとしている「いい奴」であることが明らかにされ、一味にブルックを迎え入れる合意が生まれる(47巻, pp. 192-205)。そこで、戦いが終わった後、ブルックから一味加入を求められたルフィはこれを直ちに了承するのである(50巻, pp. 149-155)。

このように、仲間選び・人材登用は確かに船長であるルフィがその契機を作ることが多く、その意志も重視されているが、それに勝るとも劣らず、他の者たちもその契機に関わり、その意志が重視されていることがわかる。仲間選びは、ルフィが発見する「おもしろい奴」が契機となる場合があっても、これだけで完結するものではなく、その者が「いい奴」であることが絶対の条件であり、そのことを一味が知り、十分理解することが前提となっているのである。

## 2.6. 「どうふるまっていいかわからないときに、つねに正しくふるまう能力」(緊急時における咄嗟の判断力)

「どうふるまっていいかわからないときに、つねに正しくふるまう能力」(緊急時における咄嗟の判断力)がルフィに備わっているとするのは内田の主張であるが、この能力は、経験則も一般論も適用できない状況で正しくふるまうための、「生きる知恵と力を高めるものとそうでないもの」を峻別できる、ある種の「生命のセンサー」によって発揮されるという。麦わらの一味もルフィの咄嗟の判断には一目置いており、後々になって彼が正しかったことを皆が知るのであるという(内田, 2014, pp. 204-205)。この「生命のセンサー」による正しい振る舞いについて明確な事例は示されていないが、一味がルフィの判断を支持しているシーンをヒントにするなら、対人的なもの、新たに一味に入る者に求める職能条件の選択や最強敵の選択のことを述べていると思われる。

まず、職能条件の選択については、ルフィが船大工が必要だと述べたとき、サンジから「たまに核心をつく」と評価された例がある(32巻, p. 164)。しかし、このような例はこれ一つだけである。例えば、「音楽家」の必要性をルフィはかなり早い段階から主張していたが(5巻, p. 135; 32巻, p. 164)、ナミからその提案は「あんた航海を何だと思ってんの」と却下されている。また、コックの必要性を最初に訴えたのはルフィではなく、ウソップである。彼は「船上では限られた食材で長旅の栄養配分を考えられる海のコック、よくよく考えれば必要な能力ってわけだ」と言っている(5巻, p. 146)。また、ナミも一味の中で最初にチョッパーと出会った際に、船医として一味に加わるよう勧誘している(16巻, pp. 76-77)。このように一味の新たな職能ニーズはルフィだけではなく、一味の誰かが思いつき、皆がそれに賛意を示すことで、決定する傾向が見て取れる。それ故、新たに一味に入る者に求める職能条件の選択について、ルフィに主導性があるとはいえないし、ましてや、それが緊急時に発揮されるものともいえない。

次に最強敵の選択については、ルフィがクロコダイルやゲッコーモリア(王下七武海の一人)と真っ先に戦おうとした際、サンジが「たまに核心をつく」と評価していることがあげられる(18巻, p. 219; 48巻, pp. 8-9)。ただし、それは緊急時に咄嗟にひねり出した(あるいは思いついた)アイデアではない。この最強敵の選択は、チョッパーが「ルフィはいつもおれ達を守ろうとして強い敵と戦おうとしている」(44巻, p. 124)と述べているように、ルフィの平素からの意識的な心がけに基づくものである。

そもそも最強敵との戦いは、ルフィのリーダーシップに関わる重要事項である。そのことは敵と戦う際にルフィの述べた台詞に示されていよう。「おれには強くなんかなくたって一緒にいてほしい仲間がいるから…」「おれが誰よりも強くならなきゃそいつらをみんな失っちまう」(40巻, p. 200)と述べ、

さらに敵に対して「お前を逃がしたら…、お前は仲間達を殺しに行く。」「俺はお前から目を離さねエ」(44 巻, p. 35)とも述べており、これらの台詞からルフィが仲間に替わって最強の敵を倒すことを自身の役割として自覚していることが窺える。この彼の心構えこそが徹底的な他者救済者として「海賊王になる」こと、そして彼と一味の者たちとの結びつきを維持することに密接に繋がっていると思われる。このことは後で改めて述べたい。

本研究では、ルフィが「どうふるまっていかわからないときに、つねに正しくふるまう能力」がない、というつもりはないが、内田の説明では証明できていないと思うのである。

## 2.7. 組織の役割分担の主導性

組織の役割分担におけるルフィの主導性について。これまでは、アーロンとの戦いでルフィが述べた台詞「おれは剣術を使えねエんだ、コノヤロー。航海術も持ってねエし、料理も作れねエし、ウソもつけねエ。おれは助けてもらわねエと生きていけねエ自信がある」(10 巻, pp. 181-182)に基づき、ルフィの主導によって彼が意識的に相互依存の組織作りを行っているとする解釈がさなれてきた。具体的には、ルフィは自らの「弱さと無能」を認めることで、麦わらの一味の者たち一人一人に「あなたなしには生きていけない」「だから生き続けてほしい」「才能を開花させてほしい」というメッセージを送り、それを聞いた彼らの「私は頼られている」という感覚によって、麦わらの一味に「強い被一依存の感覚」を乗組員にもたらし、「パフォーマンスの爆発的な開花を導き出している」という(内田, 2011, pp. 194-198)。また、ルフィの「自分の弱さを素直に認める強さの表現」によって、「仲間の能力を讃え」られた一味の者たちは、「私がいなければ…」「おれが助けなければ…」とルフィに対する信頼や仲間であるという自覚を深め、皆が進んで助け合い、自らの得意分野を伸ば

し、成長しようとする、という(安田, 2011, pp. 98-101)。

しかし、これらの見解は、ルフィの組織作りにおける主導性を過度に認める内容になっており、そのことはこれまで指摘してきたように、ルフィ以外の麦わらの一味の主導性も十分に加味しなければならず、再検討を要しよう。そもそもこのような台詞一つで、皆の結束力が高まるとか、相互依存の組織が作れるとかを議論することは、実証性が乏しいように感じられる。それよりも、組織の核となるような、ルフィと一味の者たち一人一人を結びつける求心的な軸となる関係性を物語に即して明らかにすることの方が重要なのではないだろうか。

また、この台詞の解釈そのものにも偏りがある。この台詞は、ルフィが剣術も航海術も料理もできないし、ウソもつけないと言い、皆に頼っていることを表明しているが、実はその次に、それを聞いたアーロンから「そんなプライドもクソもねエてめエが一船の船長の器か。てめエに一体何ができる」と問われ、ルフィが「お前に勝てる」と宣言しているのである(10巻, p. 183)。ここに注目すれば、「海賊王」を目指す船長＝リーダーとして敵グループ中最強敵と戦いこれを倒し、全員を守る力がある、つまり一味の中で一番重要な役割を担っているとも主張していることがわかる。この台詞の重点はアーロンに対し発せられたものであることから最後の部分にあることは間違いないであろう。これと類似する台詞は先にも紹介したが(40巻, p. 200; 44巻, p. 35 など)、このような彼の方針は、ルフィが敵と戦う際に常に念頭にあり、彼の意識する重要なリーダーシップの一つであると考えられる(前述)。決して「仲間がいるから勝てる」(安田, 2011, pp. 98-101)ではない。仲間のために一人で勝てる、というものでなければならないのである。

確かに、この台詞の解釈をルフィの無能依存部分に重点を

おけば、普段の航海では一味の者たちにそれぞれ得意分野を任せて自分は何もできない、皆の助けでなんとか旅をつづけていられるという、皆への感謝の内容ということになるが、それはルフィだけでなく一味の者たちにとっても同じことであり、まさに全員が日々痛感していることで、互いに感謝し合う性質のものであろう。

そもそも一味において、もっとも重要な依存は、危機に陥った者が一味に助けを求める場合であり、その者と一味との対応のあり方にこそ、この組織の性格が如実に表れていると思われる。その意味するところは、「私のために生きてほしい」(内田, 2011, pp. 197-198)ではなく、むしろ「私のために死んでほしい」と言うに近い。それは彼らにとって自らに危機をもたらした敵があまりに強大であり、その支配があまりに絶対的に思えるものだからである。例えば、外界からの情報を遮断して税を払わねば処刑するという恐怖政治によって人々を奴隷のように扱ったアーロン(8巻, p. 129-11巻, p. 103)、多種多様な能力を有するエージェントと虚偽の情報でクーデタを起こさせ国家乗っ取りを図ったクロコダイル(18巻, p. 48-23巻, p. 123)、多数の加盟国が属する世界政府の権威と海軍のバスターコールという島を破壊するほどの艦隊攻撃を担保に暗躍する秘密諜報機関 CP9(34巻, p. 132-44巻, p. 205)、人の影(もう一つの魂)を奪うことで、その者の自由を奪い、その影を死体に宿すことでゾンビ軍を組織したゲッコーモリア(46巻, p. 48-50巻, p. 46)など、個人など狙われれば一たまりもない勢力が敵として現れ、かつての恩人や故郷の人々や一味の命と引き換えに、自らに従うよう圧力をかけてくるのである。常識で考えれば、このような敵から自らを救済してくれるよう誰かに訴えることは、その者たちに自分のために死んでほしいと言うに限りなく近いことになるのである。

それ故、彼らは、どれだけ苦しくても救済を求めず、むし

る大切な他者を守るために自ら犠牲となる道を選んでしまう。幼少期のナミが言った台詞「私が誰かに助けを求めたら、また人が傷つくから、そんなの、もう見たくないもん」(9巻, p. 165)、ブルックが、自分のために戦うと言ってくれたルフィに言った台詞「あなた、本当にいい人ですね」「さっき会ったばかりのあなた達に私の為に死んでくれなんて言えるはずもない」(46巻, p. 60)はこのことを象徴的に示している。

また、ルフィにナミが言い放った台詞「何よ、何も知らないくせに。あんたには関係ないから、島から出て行って、言ったでしょう」(9巻, p. 199)、ロビンが一味に言った台詞「私があなた達と一緒にいたいと望めば望む程、私の運命があなたたちに牙をむく。私には海をどこまで進んでも、振り払えない巨大な敵がいる。私の敵は世界とその闇だから。…助けに来て欲しくもなかった。いつか落とす命なら、私は今ここで死にたい」(41巻, pp. 194-195)などは、一味を突き放す冷たい言葉のようであるが、その実は、絶望による諦めから、せめて一味だけでも守ろうとする自己犠牲の精神から出た言葉に他ならない。それは繰り返し言うように、彼らが自らの自由(夢の追求)をも犠牲して他者を救済しようとする、つまり、命ある限り他者に無限に責任を負いつづける者たちでもあるからである。

このような彼らに自らの救済を求めさせるには、その者を救済しようとするルフィたちも命がけである覚悟を見せていく必要がある。例えば、最後までアーロンに騙され、村を救うという一縷の望みすら失い、彼の海賊団のマークを象った腕の刺青を消そうと、泣き叫びながら腕にナイフを何度も突き刺したナミが、これを止めたルフィに呟いた「助けて」(9巻, p. 200)、国の誰もを傷つけないように自らの犠牲を厭わないビビ(クロコダイルに乗っ取られようとしていたアラバスタ王国の王女。一時期一味と共に旅をしていた者)にルフィが



叫んだ「おれ達の命くらい賭けてみろよ、仲間だろうが」(18巻, p. 222)、一味とともに生きていくという望みを涙も鼻水も垂らしてロビンが訴えた「生きたい」(前述)など。これらの台詞は、ルフィたち麦わらの一味が敵から仲間を救う最終決戦を前に発せられたものである。これらがこれまでずっと自らの自由を犠牲にしてきた者の解放の欲求を爆発させる契機となったことはいうまでもない。

そして、いざ仲間を助けるための戦いとなれば、一味は死力を尽くして命を懸けて敵を倒すまで戦う。そのことは、ウソップがロビンに語った台詞「仲間の犠牲の上に生かされてあいつらが喜ぶとでも思ってたのか。お前が一味を抜けた理由を知ったあいつらは、地獄の底でも追いかけてお前の敵をぶちのめすぞ」(39巻, p. 51)に象徴されている。この戦いにおいて、一味を支えているものは、互いに命をかけてでも仲間を助けようする信頼の感情・精神的自立だけである。料理ができないとか、ウソがつけられないとか、そのようなことへの依存ではない。ウソップは自己保身のための死んだふりをした(つまりウソをついた)自らを恥じ、ナミのこれまでの無念や仲間のことを思い、勇気を振り絞って、震える足を漸く支えながら敵前に立った(10巻, pp. 114-119)。ナミは片方の足の甲を敵の針に貫かれながら、ビビを思い、仲間のために最後まで戦い続けた(21巻, pp. 77-125)。戦闘力が弱い彼らであっても自分一人で勝つまで戦い続けるのである。「敵と握手する」(内田, 2011, p. 191)という選択肢はルフィにもないが、彼らにもないのである。敵に戦い勝つことだけが、絶望に置かれた者を救う唯一の手立てなのである。その命がけの一人一人の責任感がこの組織を支えている。

## 2.8. 大きな夢を持ち、皆を巻き込む

安田はルフィが麦わらの一味から信頼される条件の一つとして、彼が「夢を掲げ皆を巻き込むこと」をあげる(安

田, 2011, pp. 67-72; 安田, 2012, pp. 32-34)。確かにルフィの夢を叶えるための航海が、一味各々の夢をも叶えるそれになっている構図は、グランドラインに入る手前の海で一味が各々の夢を叶えることを誓う場面(12巻, pp. 30-31)などから読み取れるところである。

だが、一味各々の夢の内容(本稿 1. 一味の紹介の箇所)を具に考慮に入れると、本当にルフィの夢を叶えるための航海が皆の夢を叶えることになるのか、実は疑問に思えるところが少なくない。例えば、ゾロ、ナミ、ウソップ、チョッパーら技能系の夢はルフィが「海賊王になる」前に叶えられる可能性が十分にあるものである。それでもなお一味の者たちがルフィの夢を自分たちの「夢の総括」(安田, 2011, pp. 67-72)だと思っているとしたなら、それはまた別の意味がそこに付与されていると想定しなければならないであろう。

一味の者たち一人一人にとって一味加入の重要な動機はルフィたちと共に航海し、自分の夢を叶えることにあった。しかしその価値は先述したように、物語において命がけの徹底した他者救済よりも下位に位置づけられていた。

だが、そのような彼らであっても、特に重視している夢がある。それがルフィの「海賊王になる」という夢であった(安田, 2011, pp. 67-72; 安田, 2012, pp. 32-34)。

そもそもルフィにとって「海賊王」とはどのような存在なのか。その手がかりは、ルフィの台詞「支配なんかしねェよ。この海で一番自由な奴が海賊王だ」(52巻, pp. 96-97)にある。この台詞に使用される「自由」が、「支配」という関係概念と対になっていることを前提とするなら、「海賊王」とは誰とでも自由で対等な関係を築ける世界で「一番」の力を持つ者、最強かつ究極の他者救済者と解釈できる。

その証拠に、ルフィは敵グループ中の最強敵と戦う際、苦しむ人々を救済するために戦いながら、「海賊王になる」とも

宣言しつつ戦っている場合がある（例えば、クロコダイルとの戦い。23巻, pp.23-24, pp. 53-55）。このことから、彼にとって、救済対象者を守るために自分の命をかけ、どんな強敵であっても戦うことは、自身の夢の実現に一步近づくことをも意味していることがわかる。

それでは、一味の者たちは、自分の夢の実現とルフィのそれとが直接関りがない者もいるにも関わらず、なぜルフィの夢を重視するのだろうか。まず考えられるのは、彼らにとってルフィの夢が自らの理想ともなり得るものであったからである。彼らはルフィと同様、命がけの他者救済を志向する者たちである（前述）。その彼らにとって、ルフィの目指す「海賊王」=究極かつ最強の他者救済者は、理想そのもの、真の夢となるものであったに違いない。彼らが一味に加入した時点で、彼らが元々抱いていた個々の夢は、他者救済をし続けるルフィを最終的に「海賊王」にするための、一味を進化させる、他のメンバーの夢と有機的関連を持った個人の成長目標へと既に変化していったと思われる。

そして、もう一つ、一味の者たちがルフィの夢を重視する理由について付け加えておくと、それは彼らにかつてルフィに救われたことに対する「恩返し」、報恩行為として彼の夢を支えたいとする意識があったからと考えられる。

一味に入る以前、徹底的な他者救済のために生きる自由を奪われた状態にあったメンバーを救ったのは、麦わらの一味であるが、最終的にはルフィである。彼は皆を守るために敵グループ中の最強敵と戦い、これを「海賊王になる」という信念で撃破し、新たなメンバーが最終的に麦わらの一味に入る環境を作ってきた（1巻, pp. 139-143; 4巻, pp. 26-32; 7巻, pp. 120-124; 9巻, pp. 192-203; 17巻, pp. 61-62; 41巻, pp. 194-205等）。このことから、新たに一味に加わる者は、一味の者たちの内、最強の守護者であるルフィに特に深く恩を感じ、最強敵を倒した彼

の「海賊王になる」という信念に感銘することになると思われる。そこで、この恩を返す行為、報恩行為は自らの個々の夢に関わる得意能力を生かし、戦いの中である一定の役割を担うことで、命がけの他者救済を続けるルフィを「海賊王」にするために、彼らもまた命がけで支援するという形をとって現れることになろう。例えば、一味が絶体絶命の危機の時、ゾロが敵に対して、「ルフィは海賊王になる男だ」と言い、彼の命と引き換えに自らの命を敵に差し出す提案をしたことがあるが、これはかかる命がけの支援の最たる例である（50巻, pp. 76-78）。

彼らの報恩行為は、それが彼らの真の夢の実現と結びついている点で、自発的なもので、喜びの対象でもある。それはルフィが彼らと共に徹底的に他者救済を行い、最終的に最強敵と戦い、これを撃破し皆を守り続け、究極かつ最強の他者救済者「海賊王になる」ことを証明し続けることで維持、増幅されていくものである。そのことは、ルフィとの冒険の過程で、一味の者たちがルフィに替わり、彼が「海賊王になる」に相応しい人物であることを発言する例（20巻, p. 198; 50巻, p. 78; 65巻, p. 186; 69巻, p. 197; 76巻, p. 87; 86巻, p. 96）からも窺える。

このように「大きな夢を持ち、皆を巻き込む」とは、ルフィが「海賊王になる」夢を実現させる信念を、最強敵に勝ち皆を守ることで示し、これを通じて、一味もルフィの夢が自らの真の夢であることを確信し、その夢の実現のために、彼ら個々の夢に関わる得意能力を報恩の手段として自ら進んで用いていくことになったのである。一味が事ある毎に自らの能力を「ルフィのために役立てたい」と向上させようとするのもそのためである（その最たる例が、61巻, pp. 20-55; 65巻, p. 124; 70巻, pp. 24-25等）。

### 3. まとめと展望

ルフィのリーダーシップについて、これまで指摘されている条件の内、「無邪気さ」は、「男の子」のジェンダーとしての性格が強く、リーダーの資質と呼べるようなものではなく、また「食欲などを除き無欲」は、ルフィが一味の他の者たち同様、多種多様な欲を有していることから事実誤認であることがわかった。そして「咄嗟の時の直感力」は、該当する事例がなく証明不能であり、「他者に偏見を持たない」、「(かつての敵が自らを窮地に置く場合)、過去の確執に拘らない」、「自らの自由(夢)を犠牲してでも徹底的に他者救済する」性格などは、麦わらの一味に加入できる「いい奴」の基本条件ともいえるもので、一味の他の者たちにも共通して見られるものであった。逆に言えば、麦わらの一味とは、一人一人が組織のリーダーになれる器を有する人々の集まりであるということになる。このような組織故に、「仲間選び・人材登用」「組織の役割分担」などの一味の運営について、ルフィの主導性ばかりを強調するのは適当とはいえない。ルフィだけでは適正に対処し得ない場合もあり、一味の者たちそれぞれの活躍や機転に助けられたり、一味全体の同意を得たりする必要があったのである。

そして、ルフィのリーダーシップにおいて重視される「夢を掲げ皆を巻き込む」ことについては、一味の者たち個々の夢が必ずしもルフィの「海賊王になる」という夢に含まれるものではなく、彼同様徹底的な他者救済者を志向する一味の者たちが、彼の「海賊王」という究極かつ最強の他者救済者になることを真の夢として共感し、かつて彼に「海賊王になる」信念を以て最終的に救済されたことへの報恩として、その夢の実現に命がけで支援するというものであった。そこで一味の者たちの個々の夢に関わる得意能力は、ルフィの夢、彼らにとっても真の夢である「海賊王になる」ための構成要

素となり、日々進化をはかる対象となったのである。

ルフィがリーダーとしてできる唯一のことは、「海賊王になる」信念を以て最強敵に勝ち続け、皆の自由の最終的な守護者となり、一味を維持することにあると言っても過言ではない。ルフィが最強敵に勝ち続けることで、一味は「海賊王になる」という真の夢の実現に希望を持ち続け、そして日々の戦いの中でルフィに恩を返す命がけの支援を続けることができるのである。「勝つこと」「強いこと」に拘らない(内田, 2011, pp. 191-192)というのは一味の者たちはもちろんのこと、ルフィにとってもあり得ないことである。本研究では、彼のリーダーシップの最重要項目として、この「麦わらの一味にとっての共通の夢である「海賊王になる」ために、最強敵に打ち勝ち、皆を守りつづけていくこと」をあげたい。

しかし、このルフィのリーダーシップにも限界がある。彼らの成長と冒険の深化によって、敵が増大化、強大化すると、ルフィが最強敵に勝つどころか、これと対峙することすら難しくなる場合も出てくるからである(例えば、海軍大将黄ザルらとの戦いで皆を「救えない」と嘆くルフィ、53巻, pp. 8-25)。また、一味を中心としつつも、個々の活動が多方面になるなどして、場合によっては共に戦えないような場合も生じてくる(54巻, p. 30-59巻, p. 129; 71巻, p. 8-80巻, p. 197など)。そこで「最強敵に打ち勝ち、皆を守ること」に加え、新たに必要となるルフィのリーダーの資質が必要となってくる。それが「能力や技じゃない、その場にいる者たちを次々に自分の味方につける最も恐るべき力」(57巻, p. 182)と呼ばれるものであろう。それは、ルフィ自身の性格や能力に基づきながらも、それだけでは為す術のないもの、特殊な家族関係、数奇な歴史的運命、天運などによっても人々から助けられる力(57巻, pp. 99-205; 58巻, pp. 8-201; 59巻, pp. 8-129)、まさに神がかり的なものをも含んでいる力だと思われる。

こういう要素を含めた「その場にいる者を次々と味方につける最も恐るべき力」が、世界の王である「海賊王」となる者には必要なのではないだろうか。ここに、個人的な信頼関係構築や個人の力の追求だけではたどり着けない、ある意味、他者との競争から逸脱した特別な存在としての「王」の条件があるのではないか。本研究ではこのように想定しているが、その本格的検討は稿を改めて行いたい。

## 参考文献

- 内田樹（2011）「解説 街場の『ONEPIECE』論②—新時代を生き抜くためのしなやかなコスモロジー」尾田栄一郎『ONEPIECE STRONG WORDS 〈下巻〉』、東京：集英社
- 内田樹（2014）「解説 街場の『ONEPIECE』論③—「生きるもの」の側に与し続けるという真理」尾田栄一郎『ONEPIECE STRONG WORDS 2』、東京：集英社。
- 尾田栄一郎（1997-2018）『ONEPIECE 〈ジャンプコミックス〉』1-90巻、東京：集英社
- 安田雪（2011）『ルフィの仲間力』、東京：株式会社アスコム
- 安田雪（2012）『ルフィと白ひげ 信頼される人の条件』、東京：株式会社アスコム

